■ 自 著 紹 介 ■

アイヌのクマ送りの世界

木村英明
本田優子 編
同成社
2007.3

本書は、2005年11月に行われた本学ペリフェリア・文化学研究所主催の学際的シンポジウム『アイヌ研究の今―クマ送りの世界』の成果を集約・補筆したものである。

主に「クマ送りの民族誌」と「考古学から探るクマ送りの起源」から成るシンポジウムは、前者を本田が、後者を木村が分担し、著名な民族学者やアイヌ研究者、考古学者、生命分子学者たちを集めて行われた。周知のとおり、「クマ送り」、あるいは一般に「イオマンテ」と呼ばれる儀礼は、アイヌの人びとのアイデンティティーをもっともよく示し、種々ある儀礼のなかでも最高位に位置づけられると言われている。なかでも、子グマを生け捕りにして持ち帰り、しばらく飼育をした後に殺して送る「飼いグマ儀礼」は、アイヌと隣接するサハリンやアムール河下流域に居住する人びとの間にしか見られない極めて特異な儀礼である。狩猟というなりわいの反映であることは当然として、食料の獲得・保存戦略にかかわるlogistic mobilityの性格を色濃く残した、彼らの居住様式をもっともよく特色付ける儀礼と言えよう。こうした特異な儀礼がいつ、どのようにして生れたのか、今回のシンポジウムを終えてなお多くの課題は残されたが、これまでの研究の到達点、今後の研究の方向性を探るための格好の書物になるに違いない。

（文化学部教授　木村英明）

サムライ異文化交渉史

御手洗昭治 著
ゆまに書房
2007.4

本書では、鎖国日本をめぐる欧米各国の「異文化交渉戦略」を交渉学と異文化コミュニケーションの視点から見る。「サムライ」に対し米国やロシアはどんな戦略でのぞんだのか？　日本に近づいた英国、フランス船の思惑は？北のシルクロード「山丹交易」とは何か？北米にあった「露米会社」とは？「ペリーの食卓外交」とはどんなものであったのか？双方のネゴシエーターの人物像まで考察。現代にも通じる知恵とネゴシエーションの方法を歴史から学ぶ。

国際政治学者の木村　汎(元北大スラブ研究所所長・国際日本文化研究センター教授)は、「本書は、交渉の理論が具体例によって見事に証明された傑作であり、写真、口絵なども楽しく有意義な本。」と述べている。

目下、日本の外交に手詰り感を覚えている読者は、本書から何かヒントを得ることができるであろう。また、新聞の書評欄や学会誌などでも「元駐日大使を務め歴史学者であったエドウィンO・ライシャワー教授の指摘とペリー以前に来航した「レディ・ワシントン号」の船長と幕府側との交渉、一七九二年、根室に来航して交易を求めたロシアのラクスマンやロシアの北米「露米会社」と日露の関係、一七九六年に室蘭に来航し道南を調査・測量した英国のブロートン、それにフランス船の北海道接近など「さまざまなケース(事例)の間に有機的な関連性を示唆しながら、日本的交渉文化の歴史的背景をうきぼりにした文献である」と紹介される。

（文化学部教授　御手洗昭治）

C.S.ルイスのリーディングのレトリック：ロゴスとポイエマの統合

ブルース・エドワーズ 著
湯浅恭子 訳
彩流社
2007.2

C.S.ルイスは、20世紀を生きたアイルランドの文学者である。オックスフォード大学とケンブリッジ大学の中世・ルネッサンス文学の学者、小説家・詩人として多くの著作があるが、同様に心血を注いだのが、文学・神学の評論である。それでは、20世紀の批評キャノンの中でルイスの立場はどこにあるのであろうか？本書「C.S.ルイスのリーディングのレトリック：ロゴスとポイエマの統合」は、この問いへの真摯な応答である。ボーリンググリーン州立大学（オハイオ）のブルース・エドワーズ教授はルイスの代表的評論「語の研究」「批評における一つの実験」「個性理論の異端性」「廃棄された宇宙像」「中世ルネッサンス文学研究」等を詳細に研究し、現代批評の流れに対するルイスの見解の検証を試みた。客観性に対するルイスのゆるぎない信念、自分を超えた現実に言及できる言語的能力へのルイスの確信の基盤こそが、天地の創造主である神の歴史（His Story）のただ中に起きた「ことば」の受肉である。それこそが、ルイスのリアリティであり、ロゴスとポイエマの統合である。エドワーズ先生は、ルイスの知性と霊性、理性と想像性のインテグレーション（統合性）の研究者であり、2005年には"Not a Tame Lion"と"Further Up and Further In:Understanding C. S. Lewis"を著し、2007年にはC. S. Lewis: Life, Works, and Legacyを編集された。

（女子短期大学部准教授　湯浅恭子）